

## ➤ 29日 金曜

### ヘブル



13:10 私たちには一つの祭壇があります。幕屋で仕えている者たちには、この祭壇から食べる権利がありません。

13:11 動物の血は、罪のきよめのささげ物として、大祭司によって聖所の中に持って行かれますが、からだは宿営の外で焼かれるのです。

13:12 それでイエスも、ご自分の血によって民を聖なるものとするために、門の外で苦しみを受けられました。

13:13 ですから私たちは、イエスの辱めを身に負い、宿営の外に出て、みもとに行こうではありませんか。

13:14 私たちは、いつまでも続く都をこの地上に持っているのではなく、むしろ来たるべき都を求めているのです。

13:15 それなら、私たちはイエスを通して、賛美のいけにえ、御名をたたえる唇の果実を、絶えず神にささげようではありませんか。

13:16 善を行うことと、分かち合うことを忘れてはいけません。そのようないけにえを、神は喜ばれるのです。

13:17 あなたがたの指導者たちの言うことを聞き、また服従しなさい。この人たちは神に申し開きをする者として、あなたがたのたましいのために見張りをしているのです。ですから、この人たちが喜んでそのことをし、嘆きながらすることにならないようにしなさい。そうでないと、あなたがたの益にはならないからです。

「私たち（クリスチャン）には一つの祭壇があります。」というのは、イエス様の「みもと」ということです。イエス様が永遠の大祭司であり、完全な

るささげものであるからです。さらにここで述べられていることは、贖いのささげものは他のものと違って祭司は食べることができず、宿営の外で焼かれたということです。イエス様も外で（すなわちエルサレムの城壁外のゴルゴダで）殺されました。

つまり私たちがイエス様の贖いのみもとに行こうとするなら、宿営を出て外のゴルゴダに行かなければならないということです。宿営とはヘブル人にとってはこれまでの社会であり、旧約の律法です。他の者にとっては人間社会の神なき生き方であり、因果応報的な価値観ということになるでしょう。私たちは神なき世界を出て、みもとに行く必要があるのです。

そしてイエス様のみもとから広がっているのは、永遠の希望であり、「後に来ようとしている都」です。大いなる希望のゆえに、ここにあるような「善」を行っていきましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

